

第 31 回 JASM 教育セミナー 2025 年 9 月 9 日開催

「福祉の現場でポジティブ行動支援（PBS）がどのように活用できるのか」

大対香奈子（近畿大学総合社会学部准教授）

福祉の現場で活かすポジティブ行動支援（PBS）

本セミナーでは、近畿大学の大対香奈子准教授が、福祉の現場で活用できるポジティブ行動支援（PBS）の考え方と実践方法について解説しました。PBS は、罰によって問題行動を減らすのではなく、本人が社会でよりよく生きていくために必要な「望ましい行動」を増やし、定着させることを目指す支援の枠組みです。

1. ポジティブ行動支援（PBS）の基本的な考え方

PBS の核となるのは、問題行動そのものではなく、「増やしたい適切な行動」に焦点を当てるというポジティブな視点です。罰のような嫌悪的な手法を避け、予防的・積極的に関わることを重視します。その理論的背景には応用行動分析学があり、行動を「きっかけ（A）→行動（B）→結果（C）」という ABC フレームワークで捉えます。つまり、望ましい行動（B）を増やすために、その行動が起こりやすくなる「きっかけ（A）」を環境に仕掛け、行動の後に本人にとって嬉しい「結果（C）」が伴うように意図的に環境を整えることが支援の基本となります。

2. 成功に導くための具体的な支援ステップ

PBS の実践は、まず「将来こうなってほしい」という長期的で肯定的なビジョンを明確に描くことから始まります。このビジョンが、支援すべき行動の優先順位を決める軸となります。次に、そのビジョンから導き出された「望ましい行動」を具体的に教えます。その際、「きちんと」のような曖昧な言葉は避け、「1 分で席に着く」のように誰が見ても分かる基準で伝えます。手本を見せたり、絵や写真で手順を示したりしながら繰り返し練習し、本人がスキルを確実に身につけられるよう支援します。そして、学んだ行動が実際の場面で出やすいよう、壁にルールを貼るなどの「きっかけ」を工夫し、行動が見られた際には「具体的に」「その場で」褒めることで、行動の定着を促します。不適切な行動には簡潔に「ダメ」と伝えますが、その後で「どうすればよかったか」を一緒に考え、できたことを褒めるフォローが重要です。

3. PBS がもたらす効果と目指すもの

PBS を導入することで、子どもには授業への参加意欲の向上や問題行動の減少といった効果が期待できます。同時に、支援者にとっても大きなメリットがあります。叱る回数が減ることによって精神的な負担が軽減され、心に余裕が生まれます。福祉の現場では、多様な専門性を持つ職員間の「共通言語」として機能し、チーム全体の支援の質を高めることにも繋がります。PBS が最終的に目指すのは、子どもの行動を変えることだけではありません。支援者や家族も含め、関わるすべての人の QOL（生活の質）を向上させ、誰もが幸福になれる持続可能な支援体制を築くことです。